

## Frobenius による「群の指標と表現」の研究 (その4)

平井 武 (Kyoto)

hirai.takeshi@math.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

2004年の数学史シンポジウムのおかげから、Frobeniusの「群の指標および表現」に関する論文をすべてリストアップし、順を追って読んでみてどこまで読み込めるかを調べ、その数学的内容等との関連において感想等を報告する、という作業を始めた。1つ1つの論文はいずれも内容が重く、軽くまとめることは不可能で、どうしても詳しく内容に踏み入らざるを得ない。2004年には、群の線形表現導入以前の指標の理論 53(1896), 54(1896) および最初に線形表現を導入した論文 56(1897) を報文[平井4]にまとめた(太文字の論文番号は全集に従う)。2005年はその続きとして、57(1898), 58(1899), 60(1900)の報告を[平井5]に載せた。2006年には、61(1901), 68(1903)の報告を[平井6]にまとめた。

今回は、69(1903), 72(1903), 74(1904), 78(1907)の報告をする。残すところは、Schurとの共著 75(1906), 73(1907)である。なお、Frobeniusの有限群の指標および線形表現に関する論文全てと、今回の報告に関連する Burnside の論文は、報文末尾にリストアップしてある。

%%%%%%%%%

**69. Über die Primfactoren der Gruppendeterminante, II, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 401–409(1903).**

この論文 69 を見るためにはその前編である 54, および それに先立つ指標理論の淵源 53, を復習するのが望ましくまた必要でもある。

**復習: 53. Über Gruppencharaktere, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 985–1021(1896).**

§1 (pp.2-5)[全集ページ数]: 群  $\mathfrak{G}$  の共役類の位数等に関する等式の導出。

$h = |\mathfrak{G}|$ ,  $h_\alpha := |\alpha|$  (共役類  $\alpha$  の位数),  $h_{\alpha\beta\gamma} := |\{(A, B, C); ABC = E, A \in \alpha, B \in \beta, C \in \gamma\}|$ ,  $h_{\alpha\beta\gamma\delta}$  についての関係式など。

§2 (pp.5-9): 指標の定義と存在証明。共役類  $\alpha, \beta, \gamma, \delta$  に対して、

$h_{\alpha\beta\gamma\delta} := |\{(A, B, C, D); ABCD = E, A \in \alpha, B \in \beta, C \in \gamma, D \in \delta\}|$  とおくと、

$$(1) \quad h_{\alpha\beta\gamma\delta} = \sum_{\lambda} \frac{1}{h_{\lambda}} h_{\alpha\beta\lambda} h_{\lambda^{-1}\gamma\delta}.$$

群  $\mathfrak{G}$  の共役類の個数を  $k$  とする。  $\mathfrak{G}$  の指標は次の方程式によって定義される:

$$(6) \quad h_{\beta} h_{\gamma} \chi_{\beta} \chi_{\gamma} = f \sum_{\alpha} h_{\alpha^{-1}\beta\gamma} \chi_{\alpha} \quad (\alpha, \beta, \gamma \text{ は共役類}) \quad [\text{指標の定義方程式}]$$

ここに、 $k$  個の  $\chi_{\alpha}$  たちが未知数、 $f$  も未知の比例因数 (Proportionalitätsfactor)。

命題 53.2.1 (当方が勝手に命題にまとめて命名, 53=論文番号, 2=節番号):  
方程式系 (6) には丁度  $k$  組の相異なる解

$$(7) \quad \chi_\alpha = \chi_\alpha^{(\kappa)}, \quad f = f^{(\kappa)} \quad (\kappa = 0, 1, 2, \dots, k-1)$$

が存在する. そして,  $k \times k$  型の行列式  $|\chi_\alpha^{(\kappa)}| \neq 0$ .

(すこし後に  $f^{(\kappa)} = \chi_0^{(\kappa)}$ , ただし  $0$  は単位元  $E$  の共役類, が分かる.)

指標の定義: 群  $\mathfrak{H}$  の指標とは, 次で与えられる, 群の共役類上の特別の関数である ( $k$  個の指標  $\chi^{(\kappa)}$ ):

$$\alpha \rightarrow \chi_\alpha^{(\kappa)} \quad (\alpha \text{ は共役類を動く}) \quad (\kappa = 0, 1, 2, \dots, k-1),$$

注 53.1: 群の線形表現の理論から来た知識を使わないで, 指標を直接的に定義するのは結構難しい (§5 および論文 56 の §1 参照). また, Frobenius のいう指標は, 現代の用語では既約指標である.

◆ 群環  $C[\mathfrak{H}]$  の中で, (内部自己同型で) 不変なもの全体からなる部分環  $\mathfrak{A}$  をとる. すると, 次の命題を得る. Frobenius はある段階ではこのように理解していたのだろうか?

命題 53.\*1. (多元) 環  $\mathfrak{A} \subset C[\mathfrak{H}]$  は, 可換で, 生成元系として  $X_\alpha := \sum_{P \in \alpha} \delta_P$  がとれる. その積は (関数の convolution と同じだが),

$$X_\beta X_\gamma = \sum_\alpha \frac{h_{\alpha^{-1}\beta\gamma}}{h_\alpha} X_\alpha = \sum_\alpha a_{\alpha\beta\gamma} X_\alpha,$$

である. 従って,  $(a_{\alpha\beta\gamma})$  は環  $\mathfrak{A}$  の構造定数である. そして, 指標の定義方程式 (6) は, 可換環  $\mathfrak{A}$  の 1 次元表現を与える.

しかし Frobenius はどうして, これが本質的だ, と見通すことが出来たのだろうか (§5 および論文 56 の §1 参照).

§3 (pp.9-12): 方程式系 (6) を書き換えた別の方程式系の  $\kappa$  個の解の系の正則性を論じることにより, 次の等式を得る.

$$\sum_\alpha h_\alpha \chi_\alpha^{(\kappa)} \chi_{\alpha^{-1}}^{(\lambda)} = 0 \quad (\kappa \neq \lambda) \quad (\ell^2(\mathfrak{H}) \text{ 上での直交関係に対応}),$$

$$\sum_\alpha h_\alpha \chi_\alpha^{(\kappa)} \chi_{\alpha^{-1}}^{(\kappa)} = \frac{hf^{(\kappa)}}{e^{(\kappa)}} \quad (e^{(\kappa)} \text{ は定数}),$$

$$\sum_\kappa \frac{e^{(\kappa)}}{f^{(\kappa)}} \chi_\alpha^{(\kappa)} \chi_\beta^{(\kappa)} = \frac{hh_{\alpha\beta}}{h_\alpha h_\beta} \quad (\text{別の直交関係に対応}),$$

ただし,

$$h_{\alpha\beta} := |\{(A, B); AB = E\}|$$

$$\therefore h_{\alpha\beta} = 0 \quad (\beta \neq \alpha^{-1}), \quad h_{\alpha\beta} = h_\alpha \quad (\beta = \alpha^{-1}).$$

§4 (pp.12-14): 方程式系 (6) についての研究 (続き).

§5 (pp.14-19): 群行列, 群行列式の導入. 群の共役類上の関数と思っていた指標を, 群上の関数と捉え直すと,  $\chi(B^{-1}AB) = \chi(A)$  ( $A, B \in \mathfrak{H}$ ) を満たす関数である. この二

様の考え方を微妙に使い分ける。まず、 $h$  個の変数  $x_R, R \in \mathfrak{H}$ , を考えて、 $h \times h$  型の行列  $(x_{PQ^{-1}})_{P, Q \in \mathfrak{H}}$  をとる。別の  $h$  個の変数  $y_R, R \in \mathfrak{H}$ , との間に次の演算を与えて、第 3 組の変数  $z_R, R \in \mathfrak{H}$ , を作る：

$$z_{PQ^{-1}} = \sum_{R \in \mathfrak{H}} x_{PR^{-1}} y_{RQ^{-1}} \quad (\text{または, } z_P = \sum_{Q \in \mathfrak{H}} x_{PQ} y_Q)$$

すると、行列の積で  $(z_{PQ^{-1}}) = (x_{PQ^{-1}})(y_{PQ^{-1}})$  となる。いま、変数  $x_R$  の間に、関係  $x_R = x_P (R \sim P \text{ (共役)})$  のときを入れて、各共役類  $\alpha$  に対して  $x_\alpha = x_R (R \in \alpha)$  とおけば、変数の個数は  $k$  個に減少する。このとき積は、

$$(x_{PQ^{-1}})(y_{PQ^{-1}}) = (y_{PQ^{-1}})(x_{PQ^{-1}}) \quad (\text{可換})$$

となり、また、 $z_\gamma$  を  $x_\alpha, y_\beta$  で表すと、

$$(53.1) \quad h_\gamma z_\gamma = \sum_{\alpha, \beta} h_{\alpha\beta\gamma^{-1}} x_\alpha y_\beta$$

共役類を番号  $0, 1, 2, \dots, k-1$  で表して、行列  $(x_{PQ^{-1}})$  の行列式を

$$\Theta(x_0, x_1, \dots, x_{k-1}) := |x_{PQ^{-1}}| \quad (0 \text{ は } E \text{ の共役類})$$

とおく。上の可換性から  $\Theta$  が 1 次式の積に分解されることが分かる。その 1 次因数の一つを

$$\xi = \frac{1}{f} \sum_{\alpha} h_{\alpha} \chi_{\alpha} x_{\alpha} \quad \left( = \frac{1}{f} \sum_{R \in \mathfrak{H}} \chi(R) x_R \right)$$

とおく。ここに、 $h_{\alpha} = |\alpha|$ ,  $\chi_0 = f$  で、 $\chi_{\alpha}$  は未知である。そして  $\chi(R) := \chi_{\alpha} (R \in \alpha)$  とおいている。

行列式の  $|z_{PQ^{-1}}| = |x_{PQ^{-1}}| |y_{PQ^{-1}}|$  なる性質を使うと、次を得る：

$$f \cdot (\sum_{\gamma} h_{\gamma} \chi_{\gamma} z_{\gamma}) = (\sum_{\alpha} h_{\alpha} \chi_{\alpha} x_{\alpha}) (\sum_{\beta} h_{\beta} \chi_{\beta} y_{\beta}).$$

ここに上の等式 (53.1) を代入して、§2 の指標の方程式 (6) と同値な、次式を得る：

$$h_{\alpha} h_{\beta} \chi_{\alpha} \chi_{\beta} = f \cdot \sum_{\gamma} h_{\alpha\beta\gamma^{-1}} \chi_{\gamma} \quad (\text{注: } h_{\alpha\beta\gamma^{-1}} = h_{\gamma^{-1}\alpha\beta}).$$

もとの  $\Theta(x_0, x_1, \dots, x_{k-1})$  は次のように 1 次式の積に分解される：

$$(22) \quad \Theta = |x_{PQ^{-1}}| = \prod_{\kappa} (\xi^{(\kappa)})^{g^{(\kappa)}}, \quad \xi^{(\kappa)} = \frac{1}{f^{(\kappa)}} \sum_{\alpha} h_{\alpha} \chi_{\alpha}^{(\kappa)} x_{\alpha}.$$

これには 2 つの証明が与えてある。

**§6 (pp.19-22): 群行列式と指標.**  $h := |\mathfrak{H}|$  として、 $h^2$  個の独立変数  $x_{P, Q} (P, Q \in \mathfrak{H})$  の  $h \times h$  型行列式  $\Theta = |x_{P, Q}|$  の  $x_{A, B}$  に対する余因子を  $\Theta_{A, B}$  とおく。あらためて  $h$  個の変数  $x_P (P \in \mathfrak{H})$  をとり、 $x_{P, Q} = x_{PQ^{-1}}$  とおく。このとき、

$$(3) \quad \Theta_{A, B} = \frac{1}{h} \frac{\partial \Theta}{\partial x_{AB^{-1}}}.$$

この場合には、行列  $(x_{PQ^{-1}}), (y_{PQ^{-1}})$  は非可換である。

このあと、さらに関係  $x_R = x_S (R \sim S)$  を入れて、 $k$  個の変数  $x_{\alpha} = x_R (R \in \alpha)$  の関数と捉えて議論している。この場合には上の行列は可換である。

次の論文 54 では、 $\Theta$  を  $h$  個の変数  $x_R$  の関数と捉え、群行列式 Gruppendeterminante と呼び、その素因数分解との関係を深く論じている。

§7 (pp.22-27):  $\mathfrak{H}$  が群  $\mathfrak{H}'$  の正規部分群であるとき、 $\mathfrak{H}$  の指標と  $\mathfrak{H}'$  の指標との相互関係が調べられる。

§§8-10 (pp.27-37): 具体的な群の指標表 (詳細略)

復習: 54. *Über die Primfactoren der Gruppendeterminante, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1343-1382(1896).*

序文 (pp.38-40): 有限群  $\mathfrak{H}$ , 位数  $h = |\mathfrak{H}|$ , に対して,  $h$  個の独立変数  $x_P, P \in \mathfrak{H}$  を並べた  $h \times h$  型行列式  $\Theta := |x_{PQ^{-1}}|$ , ただし  $P, Q \in \mathfrak{H}$ , を  $\mathfrak{H}$  の群行列式 (Gruppendeterminante) という。これは 1 次同次式  $\xi = \sum_{R \in \mathfrak{H}} x_R$  で割り切れる。

- ①  $\Theta$  の既約因子 (Primfactor) の個数は  $\mathfrak{H}$  の共役類の個数  $k$  に等しい。
- ②  $\Theta = \prod_{1 \leq \lambda \leq k} \Phi^{(\lambda)} e^{(\lambda)}$  と既約因子に分解すると,  $e^{(\lambda)} = f^{(\lambda)} := \deg \Phi^{(\lambda)}$ 。
- ③  $f^{(\lambda)} = \deg \Phi^{(\lambda)}$  は群の位数  $h$  を割る。
- ④ ある線形変換によって,  $\Phi^{(\lambda)}$  は丁度  $f^{(\lambda)2}$  個の独立変数の関数になる。
- ⑤ それらの変数を合わせると丁度  $\sum_{\lambda} f^{(\lambda)2} = h$  個の独立変数になる。
- ⑥ 同じ共役類  $\alpha$  の中で  $x_A = x_B =: x_{\alpha} (A, B \in \alpha)$  とおくと, 丁度  $k$  個の独立変数が出るが, それらの 1 次式  $\xi^{(\lambda)}$  が存在して,  $\Phi^{(\lambda)} = \xi^{(\lambda) f^{(\lambda)}}$  となる。
- ⑦  $\xi^{(\lambda)}, 1 \leq \lambda \leq k$ , は互いに 1 次独立である。
- ⑧  $\xi^{(\lambda)} = \sum_{R \in \mathfrak{H}} \chi^{(\lambda)}(R)x_R$ , ただし  $A \sim B (A, B \in \alpha)$  ならば  $x_A = x_B, \chi^{(\lambda)}(A) = \chi^{(\lambda)}(B)$ , とおくと,  $\chi^{(\lambda)}$  は指標 (Charakter) を与える。
- ⑨  $k$  個の値  $\chi^{(\lambda)}(R) (R \in \alpha, \alpha$  が動く) により,  $\Phi^{(\lambda)}$  は完全に決まる。
- ⑩  $h$  個の変数  $x_A$  の入った群行列  $\Theta$  の理論は, 制限条件  $x_{AB} = x_{BA}, A, B \in \mathfrak{H}$ , を入れて  $k$  個の変数に減らしたときの話に帰着される。この制限の下では,  $\Theta = \prod_{\lambda} \xi^{(\lambda) f^{(\lambda)2}}$ 。
- ⑪  $h$  次の多項式  $\Theta = \prod_{\lambda} \xi^{(\lambda) f^{(\lambda)2}}$  の計算は,  $k$  次の多項式

$$\left| \sum_{\gamma} \frac{1}{h_{\alpha}} h_{\alpha\beta^{-1}\gamma} x_{\gamma} \right| = \prod_{\lambda} \xi^{(\lambda)} \quad (\text{行列式の一次式への分解})$$

の計算に帰着される ( $h_{\alpha\beta\gamma}$  の定義と計算に付いては, 53 参照)。

§1 (pp.41-43):  $h = |\mathfrak{H}|$  次の群行列  $(x_{PQ^{-1}})$  の行列式  $|x_{PQ^{-1}}|$  をとる:

- (1)  $(x_{P,Q}) = (x_{PQ^{-1}}) = (x) \quad (P, Q \in \mathfrak{H}),$
- (2)  $|x_{P,Q}| = |x_{PQ^{-1}}| = \Theta(x_E, x_A, x_B, x_C, \dots) = \Theta(x_R) = \Theta(x) = \Theta.$

$\varepsilon$  を  $\varepsilon_E = 1, \varepsilon_R = 0 (R \neq E)$ , とおくと,  $(\varepsilon)$  は単位行列 (Einheitsmatrix, Hauptmatrix) である。さてそこで,  $(z) = (x)(y)$  とすると,

$$z_{PQ^{-1}} = \sum_R x_{PR^{-1}} y_{RQ^{-1}} \quad \left( z_A = \sum_{RS=A} x_R y_S \right).$$

$(x_{P,Q})^n = (x^{(n)})$  とおくと,  $x_R^{(n)} = \sum x_{R_1} x_{R_2} \cdots x_{R_n} (R_1 R_2 \cdots R_n = R)$ .

$$(8) \quad (z) = (x)(y) \implies \Theta(z) = \Theta(x)\Theta(y)$$

$\Theta$  の展開は  $x_E^h$  から始まる.  $\Theta$  の既約因子 (Primfactor)  $\Phi$  の次元を  $f = \deg \Phi$  とすると,  $\Phi$  は必ず  $x_E^f$  を含んでいるので, その係数を 1 とする.

**命題 54.1.1.** 各既約因子  $\Phi$  について

$$(9) \quad (z) = (x)(y) \text{ のとき, } \Phi(z) = \Phi(x)\Phi(y) \quad [\Phi \text{ の方程式}]$$

逆に, 分解不能な ganze homogene Function  $\Phi$  が (9) を満たせば, それは  $\Theta$  の因子である.

**注 54.1.** 上の命題は, 証明も込めて実に興味深い. これを表現論から見ると, 「全ての既約表現は群の正則表現の成分として現れる」ことを意味し, 非常に重要である. この事実がかくも簡単に証明できることに衝撃を受ける.

§2 (pp.43-44):  $\Theta$  の線形項.

**命題 54.2.1.**  $\Phi$  が  $\Theta$  の線形項であるときは,  $\Phi(x) = \sum_A \chi(A)x_A$  とすると,  $\chi$  は, 可換群  $\mathfrak{h}/[\mathfrak{h}, \mathfrak{h}]$  の 1 次元表現である. また逆も成り立つ.

§3 (pp.44-50):  $\Theta$  の非線形項.  $\Theta$  の既約因子  $\Phi$  に対し,  $f = \deg \Phi > 1$  とする.  $\varepsilon_R = \delta_{R,E}$  とおくと  $(\varepsilon) = (\varepsilon_{PQ^{-1}}) = E_h$  ( $h$  次単位行列).  $\Phi(x) = \Phi(\varepsilon)\Phi(x)$ ,  $\Phi(\varepsilon) = 1$ , より,

$$\Phi(x) = x_E^f + \left( \sum_{R \neq E} \chi(R)x_R \right) x_E^{f-1} + \cdots$$

の形である.  $\chi(E) := f$  において指標 (Charakter  $f^{\text{ten}}$  Grades)  $\chi$  を得る.

$$\chi(R) = \text{“} \frac{\partial \Phi}{\partial x_R} \text{ の } x_E^{f-1} \text{ の係数”} \quad (R = E \text{ の場合も込めて);$$

$$\text{すなわち,} \quad \frac{\partial \Phi}{\partial x_R} = \chi(R) x_E^{f-1} + \cdots \quad (R \in \mathfrak{h}). \quad (54.1)$$

§4 (pp.50-52): Primfactor  $\Phi$  の微分方程式. (省略)

§5 (pp.52-54): 指標の直交関係. ここでは指標の直交関係を出している. 線形表現を全く使っていない代数的な証明である点で興味深い.

**命題 54.5.1.**  $\chi, \psi \neq \chi$  を  $\mathfrak{h}$  の指標とする.  $\Phi$  を  $\chi$  に対応する群行列式  $\Theta$  の既約因子 ((III) 式参照) とし,  $f = \deg \Phi$ ,  $e$  を  $\Phi$  が  $\Theta$  に含まれる重複度とすると,

$$(6) \quad \sum \chi(R)\chi(S) = \frac{h}{e} \chi(A), \quad \sum \chi(R)\psi(S) = 0 \quad (RS = A),$$

$$(7) \quad \sum_R \chi(PR^{-1})\chi(RQ^{-1}) = \frac{h}{e} \chi(PQ^{-1}), \quad \sum_R \chi(PR^{-1})\psi(RQ^{-1}) = 0,$$

$$(8) \quad \sum_R \chi(R)\chi(R^{-1}) = \frac{hf}{e}, \quad \sum_R \chi(R)\psi(R^{-1}) = 0.$$

§6 (pp.54-56): 主張 ⑥ の証明および線形項  $\xi^{(\lambda)}$  の具体形.

行列  $(x_{PQ^{-1}})$  と  $(y_{Q^{-1}P})$  とは可換である. これをネタにかなり長い議論により次を得る:  $x_R$  を上の通り  $h$  個の独立変数とし,  $y_R$  を  $y_{AB} = y_{BA}$  を満たす ( $k$  個が独立)

とすると  $(x_{PQ^{-1}})$  と  $(y_{PQ^{-1}})$  とは可換で,  $(y_R)$  にしか依らない量  $\eta$  があって,

$$(6) \quad \Phi(x_E + y_E, x_A + y_A, x_B + y_B, \dots) = \Phi(x_E + \eta, x_A, x_B, \dots).$$

これから次が分かる.  $\Phi^{(\lambda)}$  が指標  $\chi^{(\lambda)}$  に対応するとすると,  $x_{AB} = x_{BA}$  を満たす  $x_R$  について,  $\Phi^{(\lambda)} = (\xi^{(\lambda)})^{f^{(\lambda)}}$ , ここに,  $\xi^{(\lambda)} = \frac{1}{f} \sum \chi^{(\lambda)}(R)x_R = \frac{1}{f} \sum_{\rho} h_{\rho} \chi_{\rho}^{(\lambda)} x_{\rho}$  ( $x_{\rho} = x_R$  for  $R \in \rho$  共役類). これは, 53, §5, (22) 式の全く違う証明を与える. そして, そこでの  $\xi^{(\lambda)}$  に対する冪  $g^{(\lambda)}$  には, ここでは,  $g^{(\lambda)} = e^{(\lambda)} f^{(\lambda)}$  として別の意味が付与された.

§7 (pp.57-60): 主張① ‘Primfaktor の個数 =  $k$ ’ の証明.

上の (6) 式を  $y_{\rho}$  で微分し,  $y_{\kappa}$  を全て 0 とおけば,  $\sum_{R \in \rho} \frac{\partial \Phi(x)}{\partial x_R} = \frac{h_{\rho} \chi_{\rho}}{f} \frac{\partial \Phi(x)}{\partial x_E}$ . ここで,  $x_R$  を  $x_{AR}$  で置き換えれば,

$$(1) \quad \sum_{R \in \rho} \frac{\partial \Phi(x)}{\partial x_{AR}} = \frac{h_{\rho} \chi_{\rho}}{f} \frac{\partial \Phi(x)}{\partial x_A}.$$

両辺の  $x_E^f$  の係数を比較する.  $B$  の共役類を  $[B]$  と書けば,

$$(2) \quad \sum_{S \in [B]} \chi(AS) = \frac{h_{[B]}}{f} \chi(A)\chi(B),$$

$$(3) \quad \therefore h \chi(A)\chi(B) = \sum_R f \chi(AR^{-1}BR).$$

さらに議論を続けて, 主張①が示される.

§8 (pp.60-63): 群行列式  $\Theta$  の 1 つの Primfaktor を  $\Phi (\leftrightarrow \chi)$  とし, その重複度を  $e$ ,  $\deg \Phi = f$  とする.  $h$  個の変数  $x_R$  に代えて新しい変数  $\xi_S := \frac{e}{h} \sum_R \chi(RS^{-1})x_R$  を導入する.  $\Phi$  は対応する  $\chi$ , 従って  $\xi_S (S \in \mathfrak{H})$  で決まっている. 新変数のうち丁度  $ef$  個が一次独立であり, 行列  $(\xi) := (\xi_{PQ^{-1}})$  の階数は  $ef$  である. ここでの代数的議論は結構込み入っていて難しい.

§9 (pp.63-67): 主張② ‘Primfaktor  $\Phi$  に対し  $e = f$ ’ の証明.

その計算は見通しが悪くて難しい.

§10 (pp.67-71):  $e|f$  の証明も込めて.

行列  $(x_{PQ^{-1}})$  と  $(y_{Q^{-1}P})$  とは可換であるから, 行列式

$$(1) \quad |u x_{PQ^{-1}} + v y_{Q^{-1}P} + w \varepsilon_{PQ^{-1}}| \quad (u, v, w \text{ はスカラー})$$

は, 1 次項  $ua_{\alpha} + vb_{\alpha} + w$  の積に分解する. ここに,  $a_{\alpha}, b_{\alpha}$  はそれぞれ  $(x_{PQ^{-1}}), (y_{Q^{-1}P})$  の固有値である. ここでは, どのように 2 つの行列の固有値を順序付ければいいのかを, 2 つの新しい変数の組  $\xi_S$  と  $\eta_S := \frac{e}{h} \sum_R y_R \chi(RS^{-1})$  とを道具に使って議論している. 可換な 2 つの行列の差  $(x_{PQ^{-1}} - x_{Q^{-1}P})$  の  $\text{Rang} = r$  につき,

$$r = h - s, \quad s = \sum f.$$

ここで,  $h - r \geq s$  を示すために,  $(y_R)$  に対する一次方程式

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}} (x_{AR^{-1}} - x_{R^{-1}A}) y_R = 0 \quad (A \in \mathfrak{H}),$$

の一次独立な解として,  $y_R = x_R^{(n)}$  ( $n = 0, 1, 2, \dots, s-1$ ) が取れることが示される.

§11 (pp.71-74):  $\Phi$  を対応する指標  $\chi$  から具体的に作る.

この節では  $\Theta$  の成分  $\Phi^e$  が変数  $\xi_S$  を使って, それらの, ある小行列式の和として表示できることを示している.

§12 (pp.74-77): 指標値  $\chi(A)$  の決定する体, 主張③  $f|h$ .

群行列式  $\Theta$  の Primfaktoren  $\Phi$  を調べることは, 指標の値  $\chi(A)$  の決定に帰着される. 後者のためには指標決定方程式を解くことになる. ここでは, 定数  $\chi_\alpha^{(\kappa)}$  ( $\kappa = 0, 1, \dots, k-1; \alpha =$  共役類) の代数的・算術的性質を調べる. これらの数が属する代数体を決定している.

%%% %%%%%%%%% %%%%%%%%% %%%%%%%%% %%%%%%%%% %%%

**69. Über die Primfactoren der Gruppendeterminante, II, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 401-409(1903).**

§1 (pp.275-276)(全集ページ数):  $\mathfrak{H}$  を群,  $h = |\mathfrak{H}|$  その位数とする.  $h \times h$  の群行列  $\Theta$  の  $k$  個 ( $k =$  共役類の個数) の Primfaktoren への分解を

$$\Theta = |x_{PQ^{-1}}| = \prod \Phi^e, \tag{69.1}$$

とし,  $\deg \Phi = f$  とおく.

論文 [54] *Über die Primfactoren der Gruppendeterminante*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1343-1382(1896).

の主定理の1つとして,  $e = f$  を示した (§9).

注意 69.1.  $\mathfrak{H} \ni g \rightarrow L(g)$  (resp.  $R(g)$ ) を左正則表現 (右正則表現) とすると,

$$\begin{aligned} (x_{PQ^{-1}}) &= \left( \sum_{g \in \mathfrak{H}} L(g)x_g \right), & (x_{P^{-1}Q}) &= \left( \sum_{g \in \mathfrak{H}} R(g)x_g \right), \\ (y_{Q^{-1}P}) &= \left( \sum_{g \in \mathfrak{H}} R(g^{-1})y_g \right). \end{aligned}$$

[54] §9 での証明は, 可成りの計算と, 仰々しい観察を要したので, [54] §10 において, より簡単な方法で,  $f|e$  を示した. この論文では, 次の命題の別証明を与える. そのためには,  $r := \sum e \leq s := \sum f$  を示せばよい.

命題 69.0. つねに  $e = f$ .

[54] §10 では次の  $h$  次の行列を用いた:

$$|x_{PQ^{-1}} + y_{Q^{-1}P}| = \prod \Psi^{\xi_j}. \tag{69.2}$$

ここで,  $\Psi(x, y)$  は  $\Phi(x)$  に対応する Primfaktor であり, 次数が  $f^2$  で

$$\Psi(x, y) := \prod_{\alpha, \beta} (u_\alpha + v_\beta), \tag{69.3}$$

$u_1, u_2, \dots, u_f$  は  $\Psi(x)$  の特性根, すなわち,  $\Phi(u\varepsilon - x) = 0$  の根,  $v_1, v_2, \dots, v_f$  は  $\Phi(y)$  の特性根.

[B2] W. Burnside, Proc. of London Math. Soc., **29**, p.553  
 では,  $e \geq f$  だけが示されている.

● In [B1](1898), 1. p.208, Burnside defines as follows.

[ Let  $S_1, S_2, \dots, S_n$  denote the operations of a group of finite order  $n$ ,  $S_1$  being the identical operation. The multiplication table of the group may be written in the form

$$\left. \begin{array}{ccccccc} S_1 & S_2 & S_3 & \cdots & S_k & \cdots & S_n \\ S_2^{-1}S_1 & S_1 & S_2^{-1}S_3 & \cdots & S_2^{-1}S_k & \cdots & S_2^{-1}S_n \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ S_\ell^{-1}S_1 & S_\ell^{-1}S_2 & S_\ell^{-1}S_3 & \cdots & S_\ell^{-1}S_k & \cdots & S_\ell^{-1}S_n \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ S_n^{-1}S_1 & S_n^{-1}S_2 & S_n^{-1}S_3 & \cdots & S_n^{-1}S_k & \cdots & S_1 \end{array} \right\}$$

• So, he studied the matrix  $(x_{Q^{-1}P})$ , the antistrophe Matrix der Gruppen Matrix  $(x_{PQ^{-1}})$ , which corresponds to the right regular representation  $\mathcal{R}$  of  $\mathfrak{H}$  as

$$(x_{Q^{-1}P}) = \sum_{g \in \mathfrak{H}} \mathcal{R}(g^{-1})x_g. \quad \blacklozenge$$

● In [B2](1898), p.547, Burnside made a reference for Frobenius' work 54(1896) as follows:

[ Incidentally it is also shown that

the determinant formed from the multiplication table of  $g$  (a finite group), when in it the symbols of the operations are regarded as independent variables, has  $r$  (= the number of conjugate sets of operations in  $g$ ) distinct irreducible factors; and that

the power to which any one of these factors enters into the determinant is equal to the degree of the factor (i.e.,  $e = f$ ).

These are two main results proved by Herr Frobenius in his memoir "Über die Primfactoren der Gruppendeterminante" ([54]).]  $\blacklozenge$

● In [69](1903), p.275, Frobenius commented Burnside's work as follows:

[ Mit Hülfe der antistrophe Gruppe zeigt auch Herr Burnside, [B2], p.553, das  $e \geq f$  ist (aber nicht, das  $e = f$  ist, wie dort angegeben ist). ]

(Burnside は  $e = f$  を主張しているが, 実際には示されているのは,  $e \geq f$  である. )  $\blacklozenge$

(69.2) 式で,  $x_R \rightarrow x_R + w\varepsilon_R, y_R \rightarrow -x_R$ , とすると,

$$|x_{PQ^{-1}} - x_{Q^{-1}P} + w\varepsilon_{PQ^{-1}}| = w^r \tilde{\Psi}^{\frac{e}{f}}, \quad (69.4)$$

$$\tilde{\Psi} = \prod_{\alpha < \beta} (w^2 - (u_\beta - u_\alpha)^2), \quad r := \sum e. \quad (69.5)$$

$$\text{連立線形方程式} \quad \sum_R (x_{AR^{-1}} - x_{R^{-1}A})y_R = 0 \quad (A \in \mathfrak{H}) \quad (69.6)$$

は, 解として, 次を持つ:

$$y_R := x_R^{(n)} \quad (n = 0, 1, 2, \dots), \quad x_R^{(n)} = \sum_{R_1 R_2 \cdots R_n = R} x_{R_1} x_{R_2} \cdots x_{R_n}. \quad (69.7)$$



$$\text{また,} \quad g(u) := \prod_{k \text{ different}} \Phi(u\varepsilon - x) \quad (69.8)$$

で,  $g(X) = 0$  は,  $X = (x_{PQ-1})$  の reduzierte Gleichung である. その次数は,

$$s := \sum f. \quad (69.9)$$

主張. 命題 69.0  $\iff$  命題 69.1 + 命題 69.2.

命題 69.1.  $\text{Rang}(x_{RQ-1} - x_{Q-1P}) = h - r.$

命題 69.2. 方程式 (69.6) に対して,  $y_R = x_R^{(n)}$  ( $n = 0, 1, 2, \dots, s-1$ ) が線形独立な解の完全系.

§2 (pp.276-277): 命題 69.1 の証明.

§3 (pp.277-278): 命題 69.2 の証明のための補助定理.

補助定理 69.I.  $A, B$  を可換な  $n$  次行列, それぞれの特性根を  $a_1, a_2, \dots, a_n; b_1, b_2, \dots, b_n$  とする. 任意の整関数 (ganze Funktion)  $f(u, v)$  に対して, 行列  $f(A, B)$  の特性根が  $f(a_i, b_i), 1 \leq i \leq n,$  となるように  $a_i, b_i$  を対応付けることが出来る.

補助定理 69.II.  $A, B$  は可換な  $n$  次行列で, いずれの単因子も 1 次であるとする. このとき,  $f(A, B)$  も同じ性質を持つ.

補助定理 69.III. さらに,  $a_\kappa = a_\lambda \Rightarrow b_\kappa = b_\lambda,$  ならば,  $B$  は  $A$  の ganze Funktion である.

69.III の証明には, 具体的に ganze Funktion  $\varphi$  を作って,  $\varphi(A) = B$  とする.

§4 (pp.279-280): 補助定理 69.I, 69.II, 69.III の別証明.

§5 (pp.280-281): 補助定理 69.I, 69.II, 69.III を用いて命題 69.2 の証明.

§6 (pp.281-283):  $e = f$  は Molien の結果 (線形代数) から従う.

%%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%%

72. *Über einen Fundamentalsatz der Gruppentheorie,* Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 987-991(1903).

§1 pp.330-331.

群  $\mathfrak{H}$  の位数を  $h$  とする. 群の元  $X \in \mathfrak{H}$  の位数を  $n$  とすると,  $n|h$ . その逆として, 論文 *Verallgemeinerung des Sylowschen Satzes,* Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1895

に次の定理を与えた:

Satz 72.I.  $n|h$  とする.  $|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = E\}| = kn, k \geq 1.$

( $n = p$  素数, のときが Sylow の定理に関連する)

その証明は見通しが良くないものであったが, その自然な拡張として次を得た:

**Satz 72.II.**  $A \in \mathfrak{H}$  の中心化群  $\mathfrak{G} := Z_{\mathfrak{H}}(A)$  の位数を  $g$  とする.

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}| = k \cdot \text{GCD}\{n, g\}, \quad k \geq 0; \quad \frac{h}{g} = |\{A \text{ の共役元}\}|, \quad n|h.$$

**Satz 72.III.**  $A \in \mathfrak{H}$  を中心元とする.  $n|h$  とする.

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}| = kn, \quad k \geq 0.$$

**Satz III**  $\Rightarrow$  **Satz II** の証明.  $k > 0$  とする.  $X^n = A \Rightarrow X \in \mathfrak{G} := Z_{\mathfrak{H}}(A)$ . そして,  $A$  は  $\mathfrak{G}$  の中心元で,  $g := |\mathfrak{G}|$ .

$$\therefore X^g = E, \quad d := \text{GCD}\{n, g\} \quad \therefore A^{\frac{g}{d}} = (X^g)^{\frac{n}{d}} = E.$$

$$\exists r, s : nr - gs = d \quad \therefore X^n = A, X^g = E \Rightarrow X^d = A^r.$$

$$\text{逆に, } A^{\frac{g}{d}} = E, X^d = A^r \Rightarrow X^n = A \quad (\because X^n = (A^r)^{\frac{n}{d}} = A(A^{\frac{g}{d}})^s = A).$$

$$\text{故に, } X^g = E \text{ の下では, } X^d = A^r \Leftrightarrow X^n = A.$$

$$\mathfrak{H} \rightarrow \mathfrak{G}, A \rightarrow A^r, n \rightarrow d \text{ とすると, } |\{X \in \mathfrak{G}; X^d = A^r\}| = kd.$$

$$\{X \in \mathfrak{G}; X^d = A^r\} = \{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}. \quad \square$$

### §2, pp.331-332.

**Satz 72.IV.**  $\mathfrak{A} = \{A, B, C, \dots\} \subset \mathfrak{H}$  an invariant subset (einen invarianten Komplex, i.e.,  $R^{-1}\mathfrak{A}R = \mathfrak{A} (R \in \mathfrak{H})$ ).

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n \in \mathfrak{A}\}| = k \cdot \text{GCD}\{n, h\}, \quad k \geq 0.$$

**Satz 72.V.**  $n|h, \mathfrak{A} = \{A, B, C, \dots\} \subset \mathfrak{H}$  an invariant subset.

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n \in \mathfrak{A}\}| = kn, \quad k \geq 0.$$

**Satz IV** の証明.  $\mathfrak{A} = \{R^{-1}AR; R \in \mathfrak{H}\}$  の場合に帰着される. そこで,

$$g = |Z_{\mathfrak{H}}(A)| \Rightarrow \frac{h}{g} = |\{R^{-1}AR; R \in \mathfrak{H}\}|,$$

$$B = R^{-1}XR, Y = R^{-1}XR \text{ とおくと, } Y^n = B \Rightarrow X^n = A.$$

$B \in \mathfrak{A}$  に対する  $\frac{h}{g}$  個の方程式は, それぞれ同じ個数  $= kd, d := \text{GCD}\{n, g\}$  (by Satz

II) を持つ. 合わせると,  $\ell = \frac{kdh}{g}$  個.  $d = nr - gs \quad \therefore \ell = kr \frac{h}{g} n - ksh$ , これは,  $\text{GCD}\{n, h\}$  で割り切れる.  $\square$

また, §1 の如く, Satz V  $\Rightarrow$  Satz IV.

### §3, pp.332-333.

証明のために, 2つの補助定理を与える.

**Satz 72.VI.**  $A$  の位数  $k$  が  $n$  の各 Primzahl で割れるとする ( $p|n \Rightarrow p|k$ ).

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}| = kn, \quad k \geq 0.$$

**証明.**  $X^n = A$  が少なくとも1つの解を持つとする.  $kn$  の任意の素因数  $p$  をとると,  $p|k$  で,  $X^{\frac{nk}{p}} = A^{\frac{k}{p}} \neq E$ . ゆえに,  $nk$  は  $X$  の位数である. 従って,  $nk|h, nk|g, g := |Z_{\mathfrak{H}}(A)|$ .

$$X^n = A \text{ の解 } X \text{ を同値類に分ける: } X \sim Y \stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} X = Y^r, Y = X^s.$$

$$Y = X^\ell \text{ とするとき, } \ell \equiv 1 \pmod{k} \Leftrightarrow Y^n = A \quad (\because Y^n = X^{n\ell} = A^\ell = A).$$

$$\ell \equiv 1 \pmod{k} \text{ で } \ell, nk \text{ 互いに素, とすると, } \ell m \equiv 1 \pmod{nk} \quad (\exists m)$$

こうした  $\ell$  の個数は,  $n$ . 従って,  $|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}|$  は  $n$  で割れる.

**Satz 72.VII.** 可換群  $\mathfrak{H}$  の位数  $h$  が素数  $p$  で割れれば,  $\mathfrak{H}$  は位数  $p$  の元を含む.

**証明.** 位数が  $< h$  の群について主張が正しいとする.  $A \neq E$  の位数を  $k$ ,  $k$  の素因数を  $q$  とする.  $B = A^{\frac{k}{q}}$  の位数は  $q$ .  $q \neq p$  のときは,  $\mathfrak{B} := \langle B \rangle, \mathfrak{H}/\mathfrak{B}$  の位数は  $\frac{h}{q}$  で  $p$  で割れる. 帰納法の仮定より,  $(\exists C) \mathfrak{B}C$  位数  $p \therefore C^p \in \mathfrak{B}$ .

故に,  $C$  の位数は,  $p$  または  $pq$ . 後者の場合は,  $C^q$  が位数  $p$ . □

**§4, pp.333-334.**

Satz II から Satz V までは互いに同値. そこで, Satz V を示す.  $n = p^r$  の場合が残る. それについては, ある種の帰納法.

%%%%%%%%%

**論文 73 を見るために, 論文 60 の復習**

**73. Über die Charaktere der mehrfach transitiven Gruppen,** Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 558-571(1904).

**復習 60. Über die Charaktere der symmetrischen Gruppe,** Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 516-534(1900).

**§1 (pp.148-150):**  $\mathfrak{H}$  を  $n$  次対称群  $\mathfrak{S}_n$  とする. その位数は  $h = n!$ . その共役類の個数  $k$  は  $n$  の分割  $n = \alpha + 2\beta + 3\gamma + \dots$  の個数である. この分割で決まる共役類を  $(\rho)$  と書くと, その位数は,

$$h_\rho = \frac{n!}{1^{\alpha}\alpha! 2^{\beta}\beta! 3^{\gamma}\gamma! \dots} \tag{60.1}$$

$\rho$  を数字に対応づけて  $\rho = 0, 1, 2, \dots, k-1$  とし,  $\rho = 0$  は単位元よりなる共役類とする.  $\mathfrak{H}$  の Charakter (既約指標) は  $k$  個あるので,  $\kappa$  ( $0 \leq \kappa \leq k-1$ ) で番号づけて  $\chi^{(\kappa)}$  と書き, その共役類  $\rho$  での値を  $\chi_\rho^{(\kappa)}$  と書く.

$n$  の分割  $n = n_1 + n_2 + \dots + n_m$  ( $n_i > 0$ ) に対応して,  $\mathfrak{H}$  の部分群  $\mathfrak{G}$  を定義する:  $n$  文字のはじめの  $n_1$  個を不変にし, 次の  $n_2$  個を不変にし,  $\dots$ . この  $\mathfrak{G}$  の位数は,

$$g = n_1! n_2! \dots n_m!. \quad (\text{注: } \mathfrak{G} \cong \mathfrak{G}_1 \times \mathfrak{G}_2 \times \dots \times \mathfrak{G}_m, \mathfrak{G}_i \cong \mathfrak{S}_{n_i}). \tag{60.2}$$

$R \in \mathfrak{G}$  を  $R = R_1 R_2 \dots R_m, R_i \in \mathfrak{G}_i$ , と分解,  $R_i$  ( $1 \leq i \leq m$ ) の型が,  $n_i$  の分割

$$n_i = \alpha_i + 2\beta_i + 3\gamma_i + \dots, \tag{60.3}$$

で決まるとすれば,  $R$  の共役類  $(\rho)$  を与える  $n$  の分割は, 次である:

$$\alpha = \alpha_1 + \alpha_2 + \dots, \quad \beta = \beta_1 + \beta_2 + \dots, \quad \gamma = \gamma_1 + \gamma_2 + \dots, \quad \dots \tag{60.4}$$

このとき,  $\mathfrak{G}$  と  $\mathfrak{H}$  の共役類  $(\rho)$  との共通部分の位数は,

$$g_\rho = \sum \frac{n_1!}{1^{\alpha_1}\alpha_1! 2^{\beta_1}\beta_1! 3^{\gamma_1}\gamma_1! \dots} \cdot \frac{n_2!}{1^{\alpha_2}\alpha_2! 2^{\beta_2}\beta_2! 3^{\gamma_2}\gamma_2! \dots} \dots \tag{60.5}$$

上の  $n$  の分割を,  $\mathbf{n} := (n_i)_{1 \leq i \leq m}$  とおき,

$$X^n(\rho) := \frac{hg_\rho}{gh_\rho} = \sum \frac{\alpha!}{\alpha_1! \alpha_2! \dots} \cdot \frac{\beta!}{\beta_1! \beta_2! \dots} \dots \tag{60.6}$$

とおけば、論文 57 により、類関数  $X^n$  は、部分群  $\mathfrak{G}$  の自明表現  $1_{\mathfrak{G}}$  を  $\mathfrak{G}$  に誘導した表現  $\pi := \text{Ind}_{\mathfrak{G}}^{\mathfrak{S}} 1_{\mathfrak{G}}$  の指標である。これは既約指標  $\chi^{(\kappa)}$  の和に書ける：

$$X^n(\rho) := \sum_{\kappa} r_{\kappa} \chi_{\rho}^{(\kappa)} \quad (60.7)$$

**命題 60.1.1.**  $x_1, x_2, \dots, x_m$  を独立変数とする。(60.6) 式の右辺の和は、次の積の展開における  $x^n := x_1^{n_1} x_2^{n_2} \cdots x_m^{n_m}$  の係数に等しい：

$$\begin{aligned} (x_1 + x_2 + \cdots + x_m)^{\alpha} (x_1^2 + x_2^2 + \cdots + x_m^2)^{\beta} (x_1^3 + x_2^3 + \cdots + x_m^3)^{\gamma} \cdots \\ = \sum_n X^n(\rho) x^n. \end{aligned} \quad (60.8)$$

**§2 (pp.150-152):** 差積を  $\Delta(x_1, x_2, \dots, x_m) = \prod_{1 \leq i < j \leq m} (x_j - x_i)$ 、とおき、整数  $k_1, k_2, \dots, k_m$  に対して、

$$[k_1, k_2, \dots, k_m] := \text{sgn}(\Delta(k_1, k_2, \dots, k_m)), \quad (60.9)$$

とおく。すると、 $[k_1, k_2, \dots, k_m]$  は交代的である。 $k_i = k_j$  ( $i \neq j$ ) のときには、 $[k_1, k_2, \dots, k_m] = 0$  とおく。下の多項式展開の係数より、類関数  $\rho \mapsto \chi_{\rho}^{(\lambda)}$  を  $\lambda$  ごとに定義する：

$$\begin{aligned} (x_1 + x_2 + \cdots + x_m)^{\alpha} (x_1^2 + x_2^2 + \cdots + x_m^2)^{\beta} (x_1^3 + x_2^3 + \cdots + x_m^3)^{\gamma} \cdots \times \\ \times \Delta(x_1, x_2, \dots, x_m) \\ = \sum_{(\lambda)} [\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m] \chi_{\rho}^{(\lambda)} x^{\lambda}, \quad x^{\lambda} := x_1^{\lambda_1} x_2^{\lambda_2} \cdots x_m^{\lambda_m}, \end{aligned} \quad (60.10)$$

$$\text{ここに、} (\lambda) = (\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m), \quad \lambda_1 + \lambda_2 + \cdots + \lambda_m = n + \frac{1}{2} m(m-1). \quad (60.11)$$

**定理 60.1.** 1つの  $\lambda$  に対して、 $\rho \mapsto \chi_{\rho}^{(\lambda)}$  は  $\mathfrak{G}$  ( $= \mathfrak{S}_n$ ) の指標を与える。 $(\lambda) = (\lambda_i)_{1 \leq i \leq m}$  における順序を無視すると、相異なる  $\lambda$  には異なる指標が対応する。

$m = n$  の場合には、 $\kappa_1 < \kappa_2 < \cdots < \kappa_n$ ,  $\kappa_1 + \kappa_2 + \cdots + \kappa_n = \frac{1}{2} n(n+1)$ 、となる  $(\kappa) = (\kappa_1, \kappa_2, \dots, \kappa_n)$  が対応し、その個数は  $k$  ( $=$  共役類の個数) である。

### §3 (pp.152-154): Cauchy の公式

$$\left| \frac{1}{1 - x_{\mu} y_{\nu}} \right| = \frac{\Delta(x_1, \dots, x_m) \Delta(y_1, \dots, y_m)}{\prod_{\mu, \nu} (1 - x_{\mu} y_{\nu})} \quad (1 \leq \mu, \nu \leq m),$$

を用いて、 $\chi_{\rho}^{(\kappa)}$  たちの直交関係式と、いわゆる次元公式を証明している。

**命題 60.3.1.**  $(\kappa_i), (\lambda_i)$  の成分の順序を無視して一致するとき、 $(\kappa) \sim (\lambda)$  と書けば、

$$\sum_{\rho} h_{\rho} \chi_{\rho}^{(\kappa)} \chi_{\rho}^{(\lambda)} = \begin{cases} 0 & \text{if } (\kappa) \not\sim (\lambda), \\ h & \text{if } (\kappa) \sim (\lambda), \end{cases}$$

**定理 60.2 (次元公式).**  $f(\lambda) := \chi_1^{(\lambda)}$  とおくと、 $f(\lambda) = \frac{n! \Delta(\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m)}{\lambda_1! \lambda_2! \cdots \lambda_m!}$ .

**命題 60.3.2.** 得られている指標の集合は完全である。

§4 (pp.154-157): 指標のパラメーターとして,  $\chi^{(\kappa)}$

$$\kappa = (\kappa_1, \kappa_2, \dots, \kappa_n), \quad 0 \leq \kappa_1 < \kappa_2 < \dots < \kappa_n, \quad (60.12)$$

が得られている.  $m < n$  や  $m > n$  の場合の  $\lambda_1 < \lambda_2 < \dots < \lambda_m$  による  $\chi^{(\lambda)}$  との関係も分かる. より実用的なパラメーターとして, **Charakteristik von  $\chi^{(\kappa)}$**  と呼ばれる

$$(\kappa) = \begin{pmatrix} a_1 & a_2 & \dots & a_r \\ b_1 & b_2 & \dots & b_r \end{pmatrix}, \quad (60.13)$$

$$\begin{cases} 0 \leq a_1 < a_2 < \dots < a_r \leq n-1, \\ 0 \leq b_1 < b_2 < \dots < b_r \leq n-1, \\ a_1 + a_2 + \dots + a_r + b_1 + b_2 + \dots + b_r = n-r, \end{cases} \quad (60.14)$$

を導入する.  $r$  は **Rang der Charakteristik** と呼ばれる.

$\kappa_i$  のうちで  $\geq n$  となるものを  $n+b_1, n+b_2, \dots, n+b_r$  と書き,  $< n$  となるものを,  $n-1-a_{r+1}, n-1-a_{r+2}, \dots, n-1-a_n$  として,  $\{a_1, a_2, \dots, a_r\} = \{0, 1, 2, \dots, n-1\} \setminus \{a_j; n-r \leq j \leq n\}$  である. すると,  $r \leq \sqrt{n}$  である.

**定理 60.3.** 次元公式は次のように書き表される:

$$\begin{aligned} f^{(\kappa)} &= \frac{n! \Delta(\kappa_1, \kappa_2, \dots, \kappa_n)}{\kappa_1! \kappa_2! \dots \kappa_n!} = \frac{n! \Delta(a_1, a_2, \dots, a_r) \Delta(b_1, b_2, \dots, b_r)}{a_1! a_2! \dots a_r! b_1! b_2! \dots b_r! \prod (a_\alpha + b_\beta + 1)} \\ &= \frac{n!}{a_1! a_2! \dots a_r! b_1! b_2! \dots b_r!} \left| \frac{1}{a_\alpha + b_\beta + 1} \right|, \end{aligned} \quad (60.15)$$

ここに,  $\alpha, \beta = 1, 2, \dots, r$ .

§5 (pp.157-159): Rang der Charakteristik  $r = 1$  の場合の指標公式を与えている.

§6 (pp.159-161):  $\mathfrak{H} = \mathfrak{S}_n, \mathfrak{G} = \mathfrak{A}_n$  とすると,  $\mathfrak{H}/\mathfrak{G}$  の 1次元指標として,

$$\chi_\rho^{(1)} = \chi \begin{pmatrix} n-1 \\ 0 \end{pmatrix}_\rho = (-1)^{\beta+\delta+\dots} = (-1)^{n-s} = \text{sgn}(\rho),$$

を得る. ここに,  $s$  は共役類  $\rho$  の元に現れる (長さ 1 のものを込めた) Cyklen の個数.

$$\chi^{(\lambda)} = \chi^{(1)} \chi^{(\kappa)} = \text{sgn} \cdot \chi^{(\kappa)} \quad (60.16)$$

となっているときに,  $\chi^{(\lambda)}$  と  $\chi^{(\kappa)}$  とは **associirte** であるという.

**定理 60.4.**  $\chi^{(\lambda)}$  と  $\chi^{(\kappa)}$  とが **associirte** であるとする.

$$(\kappa) = \begin{pmatrix} a_1 & a_2 & \dots & a_r \\ b_1 & b_2 & \dots & b_r \end{pmatrix}, \quad (\lambda) = \begin{pmatrix} b_1 & b_2 & \dots & b_r \\ a_1 & a_2 & \dots & a_r \end{pmatrix}. \quad (60.17)$$

§7 (pp.161-166): 指標の値を決定しうる 2, 3 の場合を示す.

**定理 60.5.** 共役類  $\rho$  の元が  $s$  個の Cyklen からなるとする. Rank  $r$  der Charakteristik  $(\kappa)$  に対して,  $s < r$  ならば,  $\chi_\rho^{(\kappa)} = 0$ .

**定理 60.6.** 共役類  $\rho$  の元が長さ  $c$  の 1 個の Cyklus と長さ 1 の  $n-c$  個の Cyklen からなるとする. 指標の値  $\chi_\rho^{(\kappa)}$  は次のように求められる:

$$f(x) := \frac{(x-b_1)(x-b_2)\cdots(x-b_r)}{(x+a_1+1)(x+a_2+1)\cdots(x+a_r+1)} \quad \text{と置けば,}$$

$$\frac{-c^2 h_\rho \chi_\rho^{(\kappa)}}{f(\kappa)} = \left[ \frac{f(x-c)x(x-1)\cdots(x-c+1)}{f(x)} \right]_{x^{-1}}, \quad h_\rho = \frac{n!}{(n-c)! \cdot c},$$

ここに, 直上の第 1 式右辺は,  $x$  の降冪の順に展開したときの  $x^{-1}$  の係数を表す. とくに,  $\rho$  が互換 ( $c=2$ ) のとき,

$$\frac{h_\rho \chi_\rho^{(\kappa)}}{f(\kappa)} = \frac{1}{2} \left( \sum_i b_i(b_i+1) - \sum_i a_i(a_i+1) \right).$$

%%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%% %%%

**73. Über die Charaktere der mehrfach transitiven Gruppen, Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 558–571(1904).**

序文 (pp.335-335):

● 2 重可遷群  $\exists$  Charakter  $\chi$  s.t.

$\chi(R) = \alpha - 1$ ,  $R$ ,  $\alpha$  個の元を動かさないとき (長さ 1 のサイクルが  $\alpha$  個)

● 4 重可遷群  $\exists$  Charakter  $\chi$  s.t.

$\chi(R) = \frac{1}{2}\alpha(\alpha - 3) + \beta$ , または  $\chi(R) = \frac{1}{2}(\alpha - 1)(\alpha - 2) - \beta$ ,

$R$ , 1-cycle を  $\alpha$  個, 2-cycle を  $\beta$  個 (互換を  $\beta$  個) 含むとき,

(from the results of Netto)

注. Mathieu 群は,  $\mathfrak{M}_{11}, \mathfrak{M}_{12}, \mathfrak{M}_{22}, \mathfrak{M}_{23}, \mathfrak{M}_{24}$  である.

§1 (pp.335-337): Netto's results:

in §§1-2, *Untersuchungen aus Theorie de Substitutionen-Gruppen*, Crell's J. Bd.103:

**Satz 73.1.I.** 置換群  $\mathfrak{H}$  の位数  $h$ .  $\#\{\mathfrak{H}$  内の長さ  $s$  のサイクル $\} \times s = m \cdot h$ .

$\mathfrak{H}$  が  $s$ -重可遷のときには,  $m = 1$ .

**Satz 73.1.II.** 置換群  $\mathfrak{H}$  の位数  $h$ .

$\#\{\text{Kombination; 長さ 1 のサイクル } \kappa \text{ 個, 長さ 2 のサイクル } \lambda \text{ 個, 長さ 3 のサイク}$   
 $\text{ル } \mu \text{ 個, ... の集まり}\} \times s = m \cdot h, \quad s = 1^\kappa \kappa! 2^\lambda \lambda! 3^\mu \mu! \cdots$

$\mathfrak{H}$  が  $r = (\kappa + 2\lambda + 3\mu + \cdots)$ -重可遷のときには,  $m = 1$ .

証明. Young diagram で, 辺長 1 の row が  $\kappa$  個, 辺長 2 の row が  $\lambda$  個, 辺長 3 の row が  $\mu$  個, ... を用意する.

$r = \kappa + 2\lambda + 3\mu + \cdots$  個の数字をこの diagram の中に勝手に入れる. 順序を無視した各 1 種類の入れ方に付き, 異なるものが,  $s = 1^\kappa \kappa! 2^\lambda \lambda! 3^\mu \mu! \cdots$  個ある.

$\mathfrak{H} \subset \mathfrak{S}_n$ ,  $|\mathfrak{H}| = h$  とする.  $n$  文字から  $r (\leq n)$  個の相異なる  $\mathcal{T} := (\alpha, \beta, \gamma, \dots, \vartheta)$  を選ぶ.  $R \in \mathfrak{H}$  による像  $(R(\alpha), R(\beta), \dots, R(\vartheta))$  を共役と呼ぶが, その個数を  $p$  とし,  $q := |\{R \in \mathfrak{H}; R(y) = y (y \in \mathcal{T})\}|$  とおくと,  $h = pq$ .

最初に 1-cycle を  $\kappa$  個, 次に 2-cycle を  $\lambda$  個, 次に 3-cycle を  $\mu$  個, ..., (これで  $n$  文字の内,  $r$  文字が現れている) となっている Kombination の個数を  $v$  とすれば, これが問題の集合の位数である.  $v_s$  はこの型を与える  $R \in \mathfrak{H}$  の個数である. この型の  $R$  が  $h$  個ずつの部分集合に分けられることを言えばよい.

$r$  個の元の 1 つの列  $(\alpha, \beta, \gamma, \dots, \vartheta)$  の  $\mathfrak{H}$  の元による動きに注目して, 普通に計算していけば, 証明できる. (以下略)

§2 (pp.337-339):  $R \in \mathfrak{H}$  の型を  $1^\alpha 2^\beta 3^\lambda \dots$  とする.  $\alpha = \alpha(R), \beta = \beta(R), \dots$  と書くこともある. §1 の  $v$  は,

$$v = v(\kappa, \lambda, \mu, \dots) = \sum_{R \in \mathfrak{H}} \binom{\alpha}{\kappa} \binom{\beta}{\lambda} \binom{\gamma}{\mu} \dots = \frac{mh}{1^\kappa \kappa! 2^\lambda \lambda! 3^\mu \mu! \dots},$$

$s_1, s_2, s_3, \dots$  変数で,  $\text{Dimension}(s_i) = \text{Gewicht}(s_i) = i$ , とおく.

$$\text{Dim}(s_1^\kappa s_2^\lambda s_3^\mu \dots) = \kappa + 2\lambda + 3\mu + \dots.$$

$$\begin{aligned} (\text{指標公式 1}) \quad & (x_1 + x_2 + \dots + x_n)^\alpha (x_1^2 + x_2^2 + \dots + x_n^2)^\beta \dots \Delta(x_1, x_2, \dots, x_n) \\ &= \sum_{(\kappa)} [\kappa_1, \kappa_2, \dots, \kappa_n] \chi^{(\kappa)}(R) x_1^{\kappa_1} x_2^{\kappa_2} \dots x_n^{\kappa_n} \quad (73.1) \\ &= \sum_{(\kappa)} [\kappa_1, \kappa_2, \dots, \kappa_n] \chi_\rho^{(\kappa)} x^\kappa, \\ & \quad R \text{ のサイクル型} \quad \rho = 1^\alpha 2^\beta \dots \end{aligned}$$

命名 73.1.  $\text{Dimension of } \chi^{(\kappa)} := n'$ ,

$$0 \leq \kappa_1 < \kappa_2 < \dots < \kappa_n, \quad \kappa_1 + \kappa_2 + \dots + \kappa_n = n + \frac{1}{2}n(n-1),$$

$$n' := (\kappa_0 - 0) + (\kappa_2 - 1) + \dots + (\kappa_{n-1} - n + 2) = 2n - 1 - \kappa_n = n - (\kappa_n - n + 1).$$

- Charakter der Dim. 0:  $\chi_0 = 1$ ,
- Charakter der Dim. 1:  $\chi \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix} = \alpha - 1$ ,
- Charakter der Dim. 2:  $\chi \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{2}\alpha(\alpha - 3) + \beta$ ,  $\chi \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = \frac{1}{2}(\alpha - 1)(\alpha - 2) - \beta$ ,
- Charakter der Dim.  $n'$ : 個数 =  $n'$  を正整数の和として書く書き方の個数

§3 (pp.339-341): 多重可遷群のある指標.

Satz 73.3.I. 対称群の指標で,  $\text{Dimension} \leq \frac{1}{2}r$  ならば, それは各  $r$ -可遷群の指標でもある.

Satz 73.3.II.  $\forall$ ; 2-可遷群の指標は,  $\chi(R) = \alpha - 1$ ,  $R$  の型が,  $1^\alpha 2^\beta \dots$  のとき. 逆に, この指標を持てば, 2-可遷である.

Satz 73.3.III. 各 4-可遷群は, 次の指標を持つ:

$$\alpha - 1, \quad \frac{1}{2}\alpha(\alpha - 1) + \beta, \quad \frac{1}{2}(\alpha - 1)(\alpha - 2) - \beta.$$

逆に、これらの指標を持てば、4-可遷である。

§4 (pp.341-344): 対称群の指標の新表示式.

§5 (pp.344-346): 5重可遷群 Mathieu's  $\mathfrak{M}_{12}$ .  
Mathieu 群  $\mathfrak{M}_{12}$ , 位数  $h = 12 \cdot 11 \cdot 10 \cdot 9 \cdot 8$ , 共役類 15 個.

§6 (pp.346-346): 5重可遷群 Mathieu's  $\mathfrak{M}_{24}$ .  
Mathieu 群  $\mathfrak{M}_{24}$ , 位数  $h = 24 \cdot 23 \cdot 22 \cdot 21 \cdot 20 \cdot 48$ , 共役類 26 個.

%%%%%%%%%

78. Über einen Fundamentalsatz der Gruppentheorie II, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 428-437(1907).

序文 (pp.394-394): この仕事の第1部 72 では、いろいろ違った形で次の定理を導いた:

Satz A. 群  $\mathfrak{H}$  の元  $A$  に対し,  $g := |\mathfrak{G}|, \mathfrak{G} = Z_{\mathfrak{H}}(A)$  とおく.

$$|\{X \in \mathfrak{H}; X^n = A\}| = k \text{GCD}\{n, g\}, k \geq 0.$$

Charaktere という用語を zusammengesetzter Charakter (正整数係数の和), uneigentlicher Charakter (整数係数の和) にまで広げる. 新しい形の定理は,  $A = E$  のとき,

Satz B. 群  $\mathfrak{H}$  の位数  $h = |\mathfrak{H}|, n|h$  とする. 次の  $\vartheta$  は ein (uneigentlicher) Character.

$$\vartheta(R) := \begin{cases} \frac{h}{n} & \text{if } R^n = E, \\ 0 & \text{if } R^n \neq E. \end{cases}$$

§5 (pp.394-398):

$R \in \mathfrak{H}$  の位数を  $r$  とする.  $R$  が  $C[\mathfrak{H}]$  に働いた作用の特性関数は,

$$(1 - x^r) \cdots (1 - x^r) \quad (r-1 \text{ 回}) = (1 - x^r)^{\frac{h}{r}} = \sum_{0 \leq n \leq h} \vartheta_n(R) (-x)^n.$$

このとき,  $\vartheta_n$  は実数値の zusammengesetzter Charakter である ([58], 1899, S.334).

$$\vartheta_n(R) = \vartheta_n(R^{-1}) = \sum_{0 \leq \kappa \leq k-1} c_{n,\kappa} \chi^{(\kappa)}(R) = \sum_{0 \leq \kappa \leq k-1} c_{n,\kappa} \chi^{(\kappa)}(R^{-1}),$$

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}} \chi^{(\lambda)}(R) \vartheta_n(R) = c_{n,\lambda} h.$$

$$\sum_R \chi^{(\lambda)}(R) (1 - x^{r(R)})^{\frac{h}{r(R)}} = h \Phi^{(\lambda)}(x), \quad (r(R) = \text{order of } R) \quad (78.2)$$

$$\Phi^{(\lambda)}(x) = \sum_{0 \leq n \leq h} c_{n,\lambda} (-x)^n, \quad \Phi^{(\lambda)}(0) = 0 \text{ if } \lambda \neq 0 \quad (\chi^{(0)} \equiv 1),$$

$$\Phi^{(\lambda)}(x) \text{ の } x \text{ の係数は, } -\chi^{(\lambda)}(E) = -f^{(\lambda)} (= -\dim)$$

( $\therefore x$  の 1 次の項は  $r = 1$  のときのみ現れる)

$$r \text{ fixed } r|h, \quad \sum_{R:r(R)=r} \chi^{(\lambda)}(R) =: b_r^{(\lambda)} \quad (78.3)$$



$$h\Phi^{(\lambda)}(x) = \sum_{r:r|h} b_r^{(\lambda)}(1-x^r)^{\frac{h}{r}}. \quad (78.4)$$

例 78.1.  $\mathfrak{H} = \mathcal{Z}_m = \langle A \rangle$ ,

$\chi^{[d]}(A) := \rho^d$  for  $d|m$ ,  $\rho :=$  primitive root of  $x^m = 1$ ,  $\chi^{(0)} = \chi^{[m]}$ .

$$\begin{aligned} m\Phi^{[d]}(x) &= \sum_{r:r|m} \sum_{R:\tau(R)=r} \chi^{[d]}(R)(1-x^r)^{\frac{m}{r}} \\ &= \sum_{r:r|m} \sum_{R=A^s : s \equiv m/r \pmod{m}} \rho^{d\frac{m}{r}}(1-x^r)^{\frac{m}{r}} \\ &= \sum_{r:r|m} \left( \sum_{s \equiv m/r \pmod{m}} 1 \right) \rho^{d\frac{m}{r}}(1-x^r)^{\frac{m}{r}} \end{aligned}$$

$$\Phi_m(x) := \Phi^{[1]}(x),$$

$$m\Phi_m(x) = \sum_{r:r|m} \left( \sum_{s \equiv m/r \pmod{m}} 1 \right) \rho^{\frac{m}{r}}(1-x^r)^{\frac{m}{r}}.$$

$$m\Phi_m(x) = \sum_{d:d|m} \mu_d(1-x^d)^{\frac{m}{d}}, \quad \sum_{d:d|m} \mu_d = 0.$$

( $m=1$ )  $\Phi_1(x) = 1-x$ ,  $\mu_1 = 1$ ,  $\mu_2, \mu_3, \dots$ , inductively calculated,

$\Phi_m(x)$  の  $x$  の係数は,  $-f = -1$ .

$$d|m, \quad d\Phi_d(x) = \sum_{s:rs=d} \mu_r(1-x^r)^s,$$

$$\sum_{d:d|m} d\Phi_d(x^{\frac{m}{d}}) = \sum_{d:d|m} \sum_{s:rs=d} \mu_r(1-x^{\frac{m}{s}})^s = (1-x)^m. \quad \square$$

$$\Phi^{(\lambda)}(x) = \sum_{n:n|h} a_n^{(\lambda)} \Phi_{\frac{h}{n}}(x^n), \quad na_n^{(\lambda)} := \sum_{r:r|n} b_r^{(\lambda)}.$$

Satz 78.1. 群  $\mathfrak{H}$  の位数を  $h$ ,  $\chi$  を  $\mathfrak{H}$  の指標,  $n|h$ , とする.

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}: R^n = E} \chi(R) = kn, \quad k \in \mathcal{Z}.$$

Satz 78.2. 群  $\mathfrak{H}$  の位数を  $h$ ,  $n|h$ , とし,  $\varepsilon(R) := \delta_E(R)$  を  $\mathfrak{H}$  の正則表現の指標とする. 次は  $\mathfrak{H}$  の uneigentlicher Charakter である:

$$\frac{h}{n} \varepsilon(R^n) = \frac{h}{n} \cdot \text{Ch}_{\mathcal{S}_n}(R), \quad \text{Ch}_{\mathcal{S}_n} \text{ は } \mathcal{S}_n := \{R \in \mathfrak{H}; R^n = E\} \text{ の特性関数.}$$

Satz 78.2' (= Satz B).  $n|h$  のとき次の  $\vartheta_n$  は  $\mathfrak{H}$  の uneigentlicher Charakter:

$$\vartheta_n(R) := \begin{cases} \frac{h}{n} & \text{if } R^n = E, \\ 0. & \text{if } R^n \neq E. \end{cases} \quad (78.5)$$

§6 (pp.398-400): Satz B の別証を与えた後

$$\text{展開} \quad \vartheta_n(R) = \frac{h}{n} \varepsilon(R^n) = \sum_{\kappa} a_{\kappa}^{(n)} \chi^{(\kappa)}(R), \quad (78.6)$$

の係数  $a_\kappa^{(n)}$  の決定方程式:  $na_\kappa^{(n)} = \sum_{R \in \mathfrak{H}; R^n = E} \chi^{(\kappa)}(R);$

$$\text{(性質)} \quad \frac{h}{n} a_0^{(n)} = \sum_{\kappa} (a_\kappa^{(n)})^2.$$

**Satz 78.2bis.** 群  $\mathfrak{H}$  の位数を  $h$ ,  $n|h$ , とする.

部分集合  $S_n := \{R \in \mathfrak{H}; R^n = E\}$  が群をなす

$\Leftrightarrow \vartheta_n$  は  $\mathfrak{H}$  の eigentlicher Charakter である (i.e.,  $\vartheta_n = \sum_{\kappa} a_\kappa^{(n)} \chi^{(\kappa)}$ ,  $a_\kappa^{(n)} \in \mathbf{Z}_{\geq 0}$ )  
(このとき,  $a_\kappa^{(n)} = 0$  または  $a_\kappa^{(n)} = a_0^{(n)} f_\kappa$ .)

**Satz 78.3.** 群  $\mathfrak{H}$  の位数を  $h$ ,  $\chi$  を  $\mathfrak{H}$  の指標,  $n|h$ ,  $S \subset \mathfrak{H}$  を (内部自己同型) 不変集合とする.

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}; R^n \in S} \chi(R) = k \cdot \text{GCD}\{n, h\}, \quad k \in \mathbf{Z}.$$

§7 (pp.400-402):

**Satz 78.4.**  $n|h$ ,  $A \in \mathfrak{H}$ ,  $g = |Z_{\mathfrak{H}}(A)|$ ,  $\chi$  を  $\mathfrak{H}$  の指標とする.

$$\sum_{R \in \mathfrak{H}; R^n = A} \chi(R) = k \cdot \text{GCD}\{n, g\}, \quad k \in \mathbf{Z}.$$

§8 (pp.402-403):

**Satz 78.5.**  $n|h$ ,  $\chi$  を  $\mathfrak{H}$  の指標. 次は  $\mathfrak{H}$  の uneigentlicher Charakter である:

$$\vartheta(R) := \sum_{S \in \mathfrak{H}; S^n = R} \chi(S).$$

引用文献:

- [平井 1] 群の表現の指標について (経験よりの管見), 第 12 回数学史シンポジウム (2001), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 23, pp.84-94, 2002/03/20.
- [平井 2] 対称群の指標に関する Frobenius, Schur の仕事, 第 13 回数学史シンポジウム (2002), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 24, pp.53-58, 2003/03/20.
- [平井 3] Schur の学位論文および対称群の表現, 第 14 回数学史シンポジウム (2003), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 25, pp.1233-131, 2004/03/09.
- [平井 4] Frobenius による「群の指標と表現」の研究, 第 15 回数学史シンポジウム (2004), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 26, pp.222-240, 2005/03/09.
- [平井 5] Frobenius による「群の指標と表現」の研究 (その 2), 第 16 回数学史シンポジウム (2005), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 27, pp.168-182, 2006/03/29.
- [平井 6] Frobenius による「群の指標と表現」の研究 (その 3), 第 17 回数学史シンポジウム (2006), 津田塾大学 数学・計算機科学研究所報, 28, pp.290-318, 2007/03/29.

フロベニウス: 有限群の指標および線形表現に関する論文リスト  
すべて Frobenius 全集 Band III より

53. *Über Gruppencharaktere*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 985–1021(1896).
54. *Über die Primfactoren der Gruppendeterminante*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1343–1382(1896).
56. *Über die Darstellung der endlichen Gruppen durch lineare Substitutionen*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 944–1015(1897).
57. *Über Relationen zwischen den Charakteren einer Gruppe und denen ihrer Untergruppen*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 501–515(1898).
58. *Über die Komposition der Charaktere einer Gruppe*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 330–339(1899).
59. *Über die Darstellung der endlichen Gruppen durch lineare Substitutionen II*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 482–500(1899).
60. *Über die Charaktere der symmetrischen Gruppe*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 516–534(1900).
61. *Über die Charaktere der alternirenden Gruppe*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 303–315(1901).
68. *Über die charakteristischen Einheiten der symmetrischen Gruppe*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 328–358(1903).
69. *Über die Primfactoren der Gruppendeterminante II*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 401–409(1903).
72. *Über einen Fundamentalsatz der Gruppentheorie*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 987–991(1903).
73. *Über die Charaktere der mehrfach transitiven Gruppen*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 558–571(1904).
75. *Über die reellen Darstellungen der endlichen Gruppen (mit I. Schur)*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 186–208(1906).
76. *Über die Äquivalenz der Gruppen linearer Substitutionen (mit I. Schur)*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 209–217(1906).
78. *Über einen Fundamentalsatz der Gruppentheorie II*, Sitzungsberichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 428–437(1907).

Frobenius [53], [54] に関連する Burnside の論文

- [B1] William Burnside, *On the continuous group that is defined by any given group of finite order*, I, Proc. London Math. Soc., Vol.XXIX(1898), 207-224.
- [B2] William Burnside, *On the continuous group that is defined by any given group of finite order*, II, Proc. London Math. Soc., Vol.XXIX(1898), 546-565.